発問例

●二一二ページ

問 **「白昼の夢を見ている」（10 行目）「望遠鏡を逆にのぞいたみたい」（11 行目）からは「私」のどのような様子が読み取れるか。**

答 駅の改札を出て「私」の前を通り過ぎていく人々と自分が同じ場所（駅）にいるとは思えない、遠く隔てられた様子。

補 同じ場所にいながら、「私」だけが他の人々とは異なるという、「私」の孤独な様子を把握しておきたい。

問 **◉「不埒な計画」（16 行目）と言っているのは、なぜか。**

答 「大戦争」が始まった状況では、身を粉にして働いて国の役に立つあり方以外が否定的に捉えられるという事態を内面化したうえで、自分の心のあり方を口にせざるを得なくなっているから。

補 戦争状態でなければ普通に口にすることができるような希望や願いが、「不埒」であると咎められてしまうような雰囲気について考えてみる。「私」はその雰囲気に一旦は飲み込まれてはいるが、「不埒」とわかっていても口に出していることから、そうした内面化への抵抗を示しているようにも捉えられる。

語句の研究

●二一二ページ

10 白昼の夢を見ているような、　「白昼の夢」とは「白昼夢」のことをさし、真昼の夢のように非現実的な、の意。

10 人の往来のありさまも、望遠鏡を逆にのぞいたみたいに、小さく遠く思われて、世界がシンとなってしまうのです。　「往来」とは行ったり来たりすること。また、「望遠鏡」は遠くにある物を拡大して見る装置だが、ここで「私」は「望遠鏡を逆にのぞいたみたいに」と語っている。つまり、拡大とは反対に小さく見えてしまうわけだが、それは「私」の目の前を行き交う人々と自分との距離を示し、静まり返って遠く隔てられている様、「私」の孤独を表現している。

12 私は大変淫らな女なのかもしれない。　「淫ら」とは、本来性に関して慎みがなく、ふしだらなことをさす。ただし、ここで「私」が実際にどのようなことを考えているのかは、「けしからぬ空想」（二一二・8）、「軽はずみな空想」（二一二・14）、「不埒な計画」（二一二・16）の内実が語られていないのと同様に不明である。ここでは、「淫ら」の具体的内容が何かということよりも、人々の思想や生活、労働に対する統制が強まる中で、そうした統制の指し示す方向とは異なるもの、という捉え方も可能だろう。

13 大戦争が始まって、何だか不安で、身を粉にして働いて、お役に立ちたいというのはうそで、本当は、そんな立派そうな口実を設けて、　「身を粉にして働いて、お役に立ちたい」というのは、戦時下に奨励された生き方と捉えることができる。しかし「私」はそれを「立派そうな口実」と言う。ここからは「私」の批評性が読み取れよう。

注意する語句

（＊で用例を示した）

けしからぬ…普通でない。不届きだ。あるまじきことだ。
＊何の挨拶もないとは、けしからぬ奴だ。

軽はずみ…深く考えずに言ったり、したりすること。軽率。
＊犯人の軽はずみな言動が目立つ。

不埒…決着の付かないこと。らちのあかない

こと。また、法に外れたけしからぬこと。
＊不埒な考えが頭をよぎる。